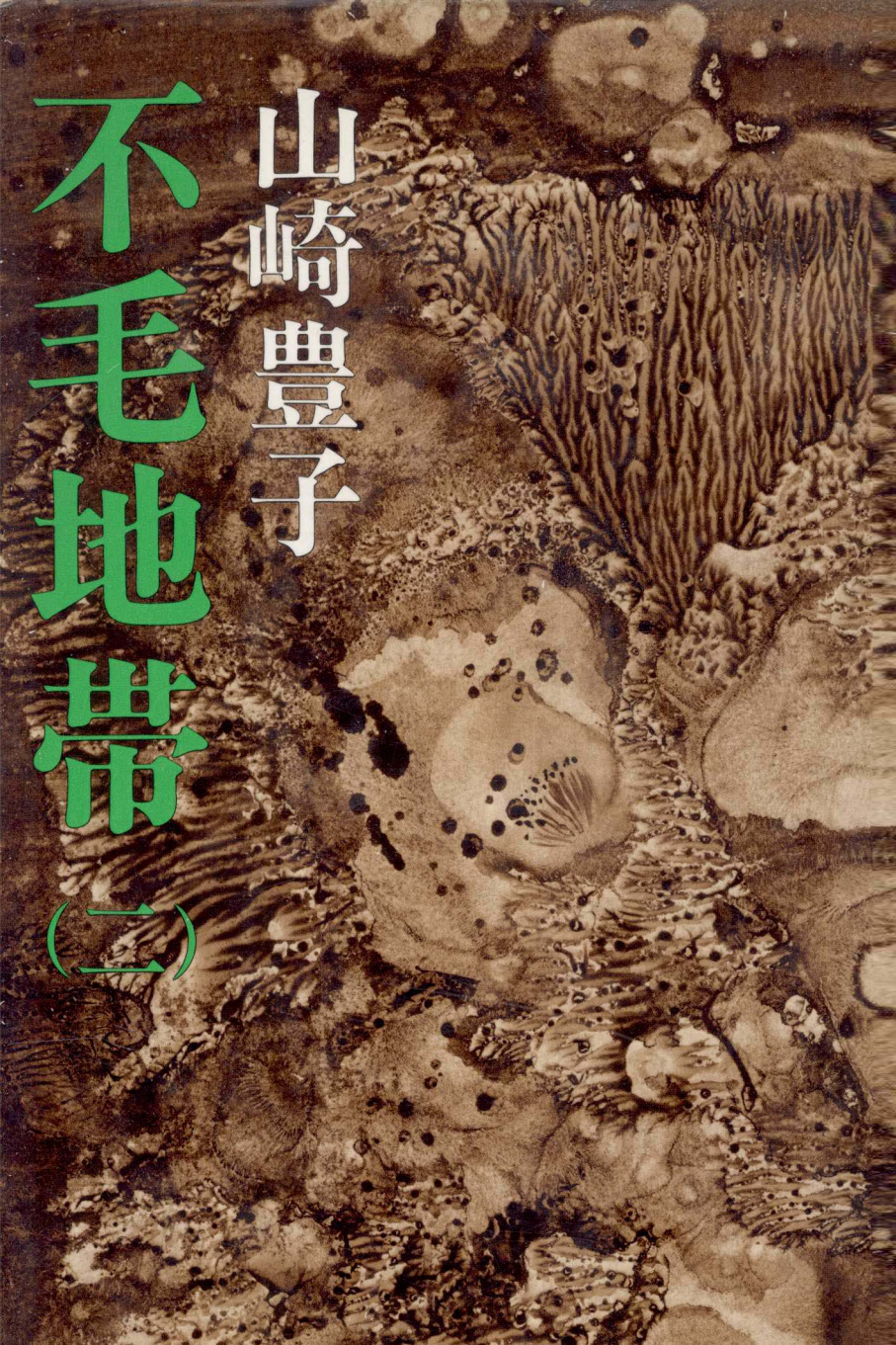


山崎豊子

不毛地帯

(二)



不毛地帯  
(二)



山崎豊子

新潮社



不毛地帯(二)

昭和五十一年七月五日 発行  
昭和五十三年十二月三十日 二十刷

定価 一〇〇〇円

著者 山崎 豊子

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一  
(業務部)〇三二六六五一一  
電話 (編集部)〇三二六六五四一一  
振替東京四一八〇八番

印刷 東洋印刷株式会社  
製本 新宿加藤製本

© 1976 Toyoko Yamazaki Printed in Japan.

乱丁・落丁本は、御面倒ですが本社通信係宛御送付下さい。送料本社負担にてお取替えいたします。

不毛地帯(二)・目次

一章	風	雲	7
二章	二つの翼		52
三章	怪鳥		93
四章	新生		141
五章	スエズ運河		186

八章  
月

七章  
波

六章  
陽

光  
……  
293

紋  
……  
246

炎  
……  
219

裝  
幀  
司  
修

不毛地帶(二)



これは架空の物語である。過去、あるいは現在において、たまたま実在する人物、出来事と類似していても、それは偶然に過ぎない。

## 一章 風 雲

近畿商事東京支社の航空機部は、一種独特の雰囲気がかつて居る。

他の営業部のように取引の電話がひっきりなしにかかつて来たり、取引客が頻繁に出入りすることもなく、妙にひっそりしている。四十人近い部員も、防衛庁や航空会社からスカウトされた中途採用の中高年齢が目立ち、部屋の一隅に各種飛行機とヘリコプターの模型が置かれ、部外持ち出し禁止の書類が入ったスタックファイルがずらりと列んでいる。

壹岐正は、アメリカ出張から帰った翌月、大阪本社から東京の航空機部に移り、既に三カ月経っていた。壹岐の身分は、航空機部嘱託であったが、実質的には航空機部次長の職務にあり、部長席に近いが、一人だけ離れた場所に机を置いて居る。

机の上には、自衛隊年鑑、第二次防衛力整備計画概況、防衛庁役職名簿、スイスの航空雑誌「インタラヴィア」をはじめ、各国の航空機関係の雑誌が四、五冊、整然と並べら

れているだけできれいに片付き、机の引出しにも保存用の書類、パンフレット以外、不用なものは何一つ入っていない。身辺を常に整理整頓することは、何事も、待て暫しなく、その日中に処理する軍人時代からの習性であった。電話のベルが鳴った。受話器を取り上げると、

「こちら支社長室です、里井常務がお呼びになっております」

と秘書が伝えた。

「解りました、すぐ伺います」

壹岐は席をたち、六階の役員室へ上って行った。

近畿商事東京支社は、京橋三丁目の昭和通りに面した六階建の古い建物で、廊下やエレベーターホールは広くゆとり設計されていたが、全体的に薄暗く、機能的でなかった。

支社長兼機械担当である里井常務の部屋は、東南角のやや明るいところにあった。里井は、繊維商社時代からの前近代的役員が多い中であって、出色のきれいで、「東京探題」として、大門社長に最も重用されている若手役員であった。

扉をノックして入ると、里井の机の前に、アメリカ出張で一緒だった与謝野外国部長がたっており、壹岐と顔を合わせるなり、

「いやあ、壹岐さん、久しぶりですね、部署が違うと、同じ社にいても、とんと顔を合わせる機会がありませんが、東

京住いは、もう慣れられましたか」

愛想よく聞いた。

「はい、おかげで——」

言葉少なに応えると、

「そりゃあ、結構です、大いに活躍載っていることは、里井常務から承っておりますよ」

大門社長の意を受けて、アメリカ出張の時は、ずっと行動を共にしながら、ロスアンゼルスへ着くまで、航空機のコの字にも触れなかった与謝野外国部長は、ばつの悪さも手伝って、さらに愛想よく云い、里井の方へ顔を向けると、「では、この件は、ご意向通り、もう一度、デュッセルドルフ支店と打ち合せ、検討させます」と話を打ちきり、部屋を出て行った。

壹岐と机を隔てて向い合うと、里井は、いつ会っても、服装の隅々までセンスの行き届いた瀟洒とした身装で、ダニヒルのシガレットケースから煙草を取り出し、口にくわえ、暫し、そのままの姿勢でいた。他の部下と同様に、さつとライターをさし出し、火を点けてくれるのを待っているのだったが、壹岐はそれに気付かなかった。

「それで、ご用件のほどは——」

壹岐が聞くと、里井は、気がきかぬ奴だという風にちら

つと壹岐を見、自分で煙草に火を点けてから、

「空幕の川又防衛部長とは、会っているのかね」

煙をふうつと吹き出しながら、聞いた。

「一カ月に一度ぐらいは、会っています」

「たった一カ月に一度——、川又防衛部長は、次期戦闘機の選定について、空幕の中枢部門にいる人物だというのに、なぜもっと積極的に働きかけないんだね？ 君たちは陸士、陸大を通じての親友だったはずじゃないか」

曾ての経歴を露骨に口にし、詰るように云った。壹岐はいささか、むっとし、

「格別の要件がない限り、むやみに会うことは無意味ですし、好ましくありません」

と云うと、里井は鼻白むように、

「君い、入社して十カ月近いというのに、いつまでもそういう紋切型の口のきき方では困るねえ、この六月、ロスアンゼルスで原田調査団が四機種候補機をテスト・フライトした結果、性能、価格を総合して、ラッキードF11が最有力というデータが出ながら、今なお防衛庁内局（内部部局）、政府間にグラント社のスーパードラゴンF11が根強く支持されているのは、何故なのか、ぬかりなく、フォローしているだろうねえ」

「その辺の事情は、もちろん、川又から聞いております、川又は防衛部長という立場上、次期戦闘機決定の政争の具に使われるのは心外に耐えぬと、しばしば防衛庁内局の官房長に意見具申し、原田空幕長も、ご自身が四候補のテスト・フライトをした体験に基き、防衛庁長官に機会あるごとにラッキードの優勢を説いておられる様子ですが、自衛

隊は文民統制が原則であるから、制服組がラッキードに固執するのは、越権行為だと発言を封じられ、純用兵的な立場から書かれた原田報告書は、内局の政略的動きによって、握りつぶされているのが、実情のようです」

壹岐は、静かな口調で説明したが、航空機部囑託になって、川又と接触するうちに、防衛庁内で、予想以上に制服組の発言力が弱いことに、矛盾を感じていた。

里井は、煙草をくゆらし、暫し、黙っていたが、

「実は、大門社長と相談し、このまま、手を拱こまいでいては、次期戦闘機はグラントのスーパードラゴンに決定してしまいかねないから、大川一郎先生に巻き返し方をお願いすることにした、大川先生とは明日、日比谷の事務所であうことになったが、大門社長はこの際、壹岐君も一緒に行つて、顔つなぎをしておいた方がいいと云われたから、そのつもりでいてほしい」

と云つた。自由党総務会長の大川一郎は、農林、通産両大臣を歴任し、総裁選ともなれば、キャスティングボードを握る派閥の長で、党人出身の野人肌が、大門一三と合い定期的に献金していた。そして二次戦闘機の売込みが火花を散らしはじめた昨年初め頃から、別途に、ロスアンゼルスロスアンゼルスのラッキード社振出しの政治献金を自社の海外支店網をフルに活用して、大川一郎の口座へ入れているのだった。

壹岐は、里井の言葉に納得が行かず、

「私が大川先生にお顔つなぎをして戴いても、何のお役に

もたないと思ひますが」と云うと、

「まあ、いいじゃないか、君は黙って、僕についてくればいいんだよ」

里井は、一方的に押しつけるように云つた。

支社長室から四階の航空機部に戻つて来ると、壹岐は重い気持で、机の前に坐つた。部内には、自分以外にも防衛庁内局や空幕からの天下り、もしくは現役中に引き抜かれた中途採用者が五人いたが、とりたてて重要な役割を果しているとは思えなかつた。

壹岐の傍へ、背は低いが、がっちりした体軀の松本航空機部長が、近付いて来た。

「壹岐君、今日から神戸へ出張しますから、突発的な情報が入つたら、頼みます」

と云い、行先の電話番号を書いたメモを渡した。

「承知しました、予定変更の場合は、ご一報下さい」

「もちろん、FX（次期主力戦闘機）決定の国防会議が開かれる日が近いと観測する向きもあるから、出張も気が気じゃないですよ」

丁寧な口調で云い、慌あわただしく出かけて行つた。壹岐に対するこうした態度は、松本部長が織維機械出身で、防衛庁へまだ深く喰い入っていないという理由だけではなく、どの部員も同じであつた。それは一次防で惨敗した近畿商事が、

二次防の次期戦闘機に優勢を伝えられているグラント社のスーパードラゴンF11を抑えて、ラッキード社のF104の売込みを成功させるには、元大本营参謀であった壹岐正の力にまつところが大きいと期待を寄せているからであった。

壹岐は、回転椅子をうしろへ廻して、眼下の昭和通りの車の流れに視線を遣りながら、今さらのように、自分が航空機部囑託となったことに思いをめぐらせた。

軍人時代の肩書や縁故を利用した対防衛庁関係の仕事には、携わりたくないと思つて来たにもかかわらず、アメリカ出張後、決心を翻したのは、大門社長に強引に押しきられたからではなく、また川又伊左雄の懇請に負けたからでもない。商社マンとして生きる決心をした以上、避けて通れぬ道だと思つたからであったが、その踏んぎりをつけたのは、川又を通して、原田空幕長の苦悩を知つたからであった。

原田空幕長を团长とする調査団は、エドワード空軍基地で、ラッキードF104、グラント・スーパードラゴンF11、コンバーF106、サウスロップF5の四機種に、四人のパイロットが総飛行時間、百時間を上廻る搭乗テストを行った後、さらにサンフランシスコ郊外のハミルトン基地において、候補機が戦闘機部隊で実際に使われている状況を視察し、八月中旬、羽田空港に帰着した。しかし空港では家族との面会だけが許され、数時間後、羽田から自衛隊の飛行機で青森県三沢の在日米軍基地内に送られ、そこで二週間、

雑詰めになつて膨大な報告書を作成し、山城防衛庁長官に提出したのだった。本来なら、調査団長から報告書を受け取れば、防衛庁長官は直ちに庁議を開き、調査報告書にもとづく防衛庁の機種決定案を作成し、最終決議機関である政府の国防会議に提出するのが通常であったが、防衛庁の機種決定案はどうしたわけか一向に出来上らず、原田調査団の報告は、防衛庁内局に握りつぶされたままになつてゐるのだった。

来年の三月をもつて退官する原田空幕長が、二次防整備は空幕に対する自分の最後のご奉公だと、川又に洩らしたと聞いた時、壹岐は惘々として胸を搏つものを覚えた。エドワード基地で、三十代の現役のパイロットでさえ、超音速のテスト・フライトには、失禁し、下半身がぐしょぐしょになる程、体力を消耗するのを、眼のあたりに見た壹岐には、五十四歳の原田空幕長の体にどれ程、こたえるものか、想像を絶するものがあつた。にもかかわらず、原田空幕長が何万フィートもの上空でマッハ2のテスト・フライトに何時間も挑んだのは、最後の「ご奉公」という純粋な気持ちでなければ、出来ない行為であつた。

自衛隊のシビリアン・コントロールという建て前は、敗戦後の国情からすれば、やむを得ないと壹岐も思う。しかし、原田調査団帰国後の新聞は、こぞつてグラントのスーパードラゴンF11の優秀性を書きたて、ラッキードF104の危険性を煽りたてている。どこから流れている情報か、解

らなかつたが、それが壹岐をして大門社長に東京の航空機部への転属を申し出させたのだった。大門は、アメリカ出張という手のこんだお膳だてをして、ようやく首をたてに振らせた喜びで、航空機部次長のポストを与えようとしたが、壹岐は、「いささか考えるところがありますから」と、囑託の身分のまま航空機部へ行くことを願ったのだった。短かくなった煙草を灰皿にもみ消しかけ、壹岐は自分を呼ぶ声に気付き、眼を上げると、小出宏がやや猫背気味の姿勢でたっていた。

「どうも失敬、何か用でも？」

小出は、二年前、防衛庁空幕の調査課班長から、近畿商事へ入社した人物であつた。

「あの、何かお考えごとなら、後ほど——」

「いや、別に——、まあ、掛け給え」

壹岐は、前の椅子を眼で指した。小出は椅子に坐ると、ちよつと周囲を見廻してから、

「実は昨夜、空幕の装備部の連中が全員で、青山のバー『白い館』を一晚、借りきって飲みあかしたということ、小耳に挟みましてねえ」と切り出した。

「それで？」

壹岐は、そんな類いのくだかしい話を聞く興味はなく、先を促すと、小出はせっかく、入手した情報をそんな風にあしらわれることが不満らしく、

「それでと簡単におっしゃいますが、今の情況下においては、由々しいことではありませんか、第一、防衛庁の月給で、青山のバーを借りきって飲み明すなど、私自身の経験から推しても出来るはずがないではありませんか」

「つまり、どこかの商社か、メーカーが接待したというわけだね」

「そうなんですよ、飲みにつれて行かれた一人に、私がいつも情報を流させている部下がおりまして、彼が云うには、昨日、勤務時間が終つて暫くすると、いつも出入りしている東京商事の担当者が、千円の会費で、飲み放題のバーを知っているので行きませんか、誘いに来たんだそうですよ、連日、遅くまで仕事が続いたあとで、ちよつど飲みたい気分だった上に、東京商事の担当者の誘い方が、こそこそなら警戒もするけど、あんまり堂々としているので、つい行こうという気になり、その場にいた全員が、千円札一枚持つて、繰り出したというわけです、その時は、日頃飲んだこともないスコッチを飲み、いい気分だったが、一晚たつて考えてみると、他に客は全くいなかったし、千円であれだけ飲み放題できるわけがないので、やつと東京商事にやられたことに気付いたそうですよ」

小出は義憤に駆られるように話したが、そのくどくどしい話し方には羨望が籠められており、小出自身、曾て近畿商事からそれに近い甘い接待を受けたことがある様子であつた。そんな小出の顔を、壹岐は改めて、まじまじと見詰

めた。小出が航空自衛隊に入ったのは、アメリカ留学が出来ることに魅せられたからであった。念願の留学を終え、その後、空幕の防衛部調査課班長になった時、職務を利用して近畿商事と結びつき、防衛庁の内部の機密情報を洩らしたことが発覚しかけ、調べを受けかけたのをきっかけに、空幕を辞め、近畿商事入りをしたのだった。そのため、小出は自分の骨を拾ってくれた機械担当役員の里井常務に恩義を感じ、自分の同僚や部下がまだ空幕の現役にいる間に、近畿商事を利用する大仕事をやり、実績を作っておこうとする焦りが、滲み出ていた。

「あの、壹岐さん、私に何か——」

小出は、真面目だが、気の弱そうな眼を、壹岐のまじまじとした視線から逸<sup>まは</sup>せるようにして聞いた。

「いや——、ところで、その東京商事の航空機部だが、実際に動かしているのは、部長の鮫島とかいう人物なのか、それとも、もっと上層部の役員なのかね」

「鮫島部長そのものです、極端に言えば、『航空機の東京商事』という今日の実勢を築いたのは、鮫島さんの手腕によるものですよ、鮫島のように一度、あの人に喰いつかれたら最後、血を流すまで離さない、一種の怪物ですよ」

「ほう、怪物——」

壹岐が、興味あり気に問い返すと、

「ま、見方によれば、りっぱなビジネスマンと云えるんですけど、何しろものを売り込むためには、名実ともに身

を挺して働く人ですからねえ、まだ四十五歳ですが、昔から逸話が絶えない人物ですよ、里井常務や、松本部長から噂を聞いておられませんか」

「名前はよく聞かすけれど、どういう人物なのか、ちょうどいい機会だ、詳しく聞かして貰いたいな」

と云うと、小出は生き生きとした表情で、

「鮫島さんは、昭和二十八、九年頃はまだ東京商事のニューヨーク駐在員で、航空機担当でした、今では、ちよつと考えられないことですが、当時、航空自衛隊が発足したばかりで、国内では情報が取れないから、防衛庁関係の人間が、アメリカ出張となると、各商社はニューヨークで迎え撃って、日本の防衛庁は将来、どのような防衛構想のもとに、どんな飛行機を買い入れたがっているか、探り出そうと必死になるわけです。ですから、極秘裡に羽田を発つても、どういう経路で知れ渡るのか、ニューヨークの空港には、各商社の駐在員が、熱海の温泉旅館の客引きよろしく、ずらりと待ちかまえているのですよ。そして凄じい争奪戦になって、新調して行った背広の袖が千切れたという笑えん実話もあるぐらいですよ、ところが、東京商事の鮫島さんは、他の商社マンが、お客の身柄を取り合う争奪戦をやっているどさくさに、荷物をひったくって、自分の車のトランクに入れて鍵をかけてから、はい、お荷物はこちらにございますと、大声で云うんだそうです。そうすると、人間というのは、いやでも荷物の方へくっついて行くもの

だそうですよ、そうしておいて日本から予約しておいたそのお客のホテルを一方的にキャンセルし、自分のところを用意したホテルへ連れ込んで、滞在中はよその商社とは一切、コンタクトさせない一方、防衛庁の人間も、当時はまだ言葉も不自由だし、地理も不案内、タクシーを雇うほどの出張費もないから、つい商社を頼らざるを得なくなり、頼れば自らおのづか、こういうものを買いたいという商談にもなりませんから、鮫島さんはこの術で、航空自衛隊の発足当初から国防関係の情報をじゅんじゅん取り、アメリカの航空機メーカーへも深く喰い込んでしまったというわけです」

壹岐は、半ば失笑し、半ば感心して、小出の話を聞きながら、大門社長がロスアンゼルスで「東京商事は、目的のためには手段を選ばんやり方をする」と苦虫を噛みつぶしたように云った言葉を思い出していると、小出は急に体を乗り出し、

「そんな調子ですから、繊維機械出身のうちの松本部長など、今まで手もなくやられてるんですよ、われわれは壹岐さんを迎えた以上、グラントからラッキードへ逆転させるため、壹岐さんの手足になつて働かせて貰います、それには、ほんとうは壹岐さんが部長、せめて次長のポストで采配を振って戴きたいんですがねえ」

部長が出張したことを幸い、阿るおもねように云い、自分の席へ戻つて行つた。

そんな小出のうしろ姿を見やりながら、壹岐は、ほろ苦

い思いを噛みしめた。壹岐が、大門の云う次長のポストを辞退したのは、これまでのような飲み喰いさせる単純な饗応作戦や、金品をばら撒くより、もつと高度な戦術で、ラッキードに逆転させるためであった。そのために綿密に布陣し、逐次、術を打って行くには、囑託じゆくたくという身軽なポストの方がいいし、万一、自分の打った術が失敗して、スキヤンダルになつた場合も、近畿商事の社名を傷つけずにすむからであつた。

五時半で仕事を切り上げると、壹岐は久しぶりに銀座の方へ足を向けた。航空機部に移つてから、職務手当がつき、壹岐は、いつも苦勞をかけている妻に、何か買ってやりたかつた。

十月末の銀座は、もう冬ものの色とりどりの衣裳がショーウィンドーを華やかに彩つていた。壹岐は、妻への買物をあれこれと考え、暖かそうなショールを買ふことにした。ショーウィンドーに和装品が並んでいる店へ入り、陳列ケースを覗いていると、女子店員が寄つて来た。

「奥様のショールでございますか、お好みのお召物の色は何でしょうか？」

「そうだねえ、特に何色と云われても……」

着物は戦災で失つてしまい、これというものはないが、昔、紫系統の着物を好んで着ていたことを思い出し、



「紫色のものが、多いようだったが……」

「じゃあ、この淡い藤色のモヘアが、きつとお似合いになると存じます」

陳列ケースの中から藤色のショールを出して見せた。柔らかな手触りであった。

「じゃあ、これを——」

買求めながら、壹岐は、妻の驚く顔を思いうかべ、店を出た。東京へ転勤以来、はじめて壹岐は心が和むようだった。

壹岐は、銀座から地下鉄で渋谷へ出、東横線とうよこせんに乗りかえて都立大学で降りると、柿ノ木坂の家まで十分程の道を急ぎ足で歩いた。東京の住いは、たまたま近畿商事の鉄鋼部長が、メルボルン支店長として赴任したので空家になり、そこへ入るようにと勧められたのだった。

駅前の商店街を通りぬけ、二丁ほど行くと、静かな住宅街になり、家々の門に灯りが点いている。大阪の大和川の市営住宅の時のように、道を歩いても、家の中から台所の流しの音や、子供の声が聞えて来ず、板塀いたへいや生垣なまがきを通して、家の灯りが洩れて来るだけであった。そうした並びの生垣に囲まれた七十坪の敷地に、三十坪の木造二階建の家が、壹岐の新しい住いであった。戦前、住っていた杉並の高円寺の家と比べれば、庭は狭いが、大阪の六畳と四畳半二間に、台所と便所という市営住宅から引越して来た壹岐の一家にとっては、充分な住いであった。

門を開け、玄関の戸を開けると、妻の佳子よこが出迎えた。

「お帰りなさい、湯豆腐の用意をしますのよ」

と云う妻に、壹岐は黙ってショールの包みを渡した。

「あら、直子の？ それとも誠？」

「いや、お前のショールだよ」

と云うと、佳子は信じられぬような顔をし、

「私の結構ですって、あんなに云ってましたのに」

「そんな風に云うにきまっているから、黙って買って来たんだよ」

壹岐は、上衣の内ポケットの月給袋を出して、手渡しながら、居間へ入ると、高校生の直子と中学生の誠が、庭の物置へ大阪の家で使っていた古い机をしまい込んでいる。独立した勉強部屋があるようになったので、腰かけ式の新しい勉強机を買入れたのだった。二人で物置の片付けをしていたが、直子は目敏く、母の手にしている包みを見つけて、

「お母さん、何なの」

庭から、声をかけた。

「食事がすんだら、見せてあげるわ、あなた方も早く片付けて、上っていらっしゃい」

直子たちは、よいしょと声をかけ合って、片付け、茶の間に入って来た。

「まあ、銀座の和装品店の包み紙ね、開いていいでしょ」直子は、手をのばして、包みを開き、